二月の幼兒童謠

葛原しげる

二月は、寒い冬の中でも、一番寒さのひどい月です。しかし、子供は「風の子」といはれます。その風は、寒い風の謂です。決して、夏の風や、春秋の風の事ではなくて、冬の寒い風の子だといふのです。

子供　風の子――ぢいばば　火の子

こは、兵庫縣印南郡東神吉地方の古の童謠ださうですが、「子供は風の子」こは、全國的に謂はれてをります。

大寒小寒
山から小僧がないて來た
なんといつてないてきた
寒いといつて
ないて來た

（日本童謠民謠曲集）

こは、千葉縣野田地方の古い童謠ださうですが、「大寒小寒」こは今でも、方々で聞く事であり、「大波小波」といひ、「大風小風」や「大雨小雨」こさへいひます。右のを、少しかへて、山から小僧が、「ないて來た」のでなく、「こんできた」にして、後をつゞけたのに次のがあります。

―大寒小寒―

竹内武雄氏歌
河村光陽氏曲

大寒小寒で日がくれた
山から小僧がこんできた
こん〳〵木枯冬の風
お山はこがつた銀の山
寒がり坊主のお小僧が
すべつてころんで泣きだせば
大寒小寒で月が出た
山から木の葉がこんできた

（童謠唱歌名曲全集）

これと似て非なるものに次のがあります。烏を出してまた木の葉を扱つてあります。そして「あれ〳〵」や「カァカァ」と「ヒラ〳〵」なぞの、こない方が―また、第一節の「四つ五つ」に對して、第二節の「六つ七つ」の續け方が―如何にも調つてをります。

―大寒小寒―

石原和三郎氏歌
田村虎藏氏曲

一、大寒小寒冬の風
あれ〳〵烏が四つ五つ
カァ〳〵〳〵こないてゆく
あれは塘にかへるのか

二、大寒小寒冬の風
あれ〳〵木の葉が六つ七つ
ヒラ〳〵〳〵こ舞うてゆく
あれはどこまでこんでいく

「大雪小雪」でなくて、「初雪」を「小雪」とした次のがあります。「初雪小雪」と、同格名詞にしたのです。そして、雪に白鷺を、あしらつたのは、幼兒向には何うかと思ひますが、そして、入江に、もやつてゐる船が、夕餉たく煙を上げてをり、「ちら〳〵雪に日は暮れかゝる」などゝは、稍々童謠の本態から遠ざかりかけてゐると思ひますが、第一節が活きてをります。しかし、どうも、幼兒向としては、高級のものに屬して、結構な情景です。

―初雪小雪―

鹿島鳴秋氏歌
江澤清太郎氏曲

一、初雪小雪どん〳〵橋渡る
あの子はさむそ
はよ〳〵もどり
爐にほだくべよ

二、初雪小雪筏の上に
白鷺一つ
なになに見てる
おとゝがゐるか

三、初雪小雪入江の船の
ままたく煙
ちら〳〵雪に
日は暮れかゝる

（童謠唱歌名曲全集）

雪の童謠は、古くから多い中に、富山市方面の、「ちら〳〵雪」は、面白いと思ひます、「大寒小寒」みたいに、小僧にしないで、猿にしてをります。そして漸進法によつて、一句一句に進展させ變化させて、後には、「いたけりや、蘂つけ

藥つけ」と、笑はせてゐます。これは「子守唄」の中にもある手法ですが、幼兒には、ひどく悅ばれるものです。

—ちら〳〵雪—

雪がちら〳〵降つてきた
山の猿泣いてきた
ごう言うて泣いてきた
寒い言うてないて來た
寒けりやあたれ。あたりや熱いや
熱けりやさがれ。さがりや尻の皮むけるら
むけりや綿しけ、綿しきやひつつくわ
ひつつきやむしれ。むしりやいたや
いたけりや、いたやの藥つけ、藥つけ

（日本童謠民謠曲集）

（この中の「むけるら」とは何の意味でせう富山方面の方に、たゞしかねてをります。）

次に、前の國語讀本中の「雪」も作曲されましたが、これは、曲の爲に作歌されたかと思はれるほど、整頓してをります。

— 雪 —

黑澤隆朝氏曲

一、降る〳〵雪が　ましろな雪が
　あちらの山に　こちらの森に
二、積る〳〵雪が　ましろな雪が
　わらやのやねに　板屋のやねに
三、咲いた〳〵花が　ましろな花が
　松の木の枝に　竹の葉の上に

（童謠唱歌名曲全集）

これに稍似てゐる拙作に、次のがあります。之は第一節で「降れ〳〵」といつて、第二節では、その命令（？）念願（？）が叶つて「降る〳〵」なのです。それだけの事ですが、天空薄暗く、雪、しきりに降るといふ樣子が、如實に分るやうにと、多少の心用意をしたものです。

— 雪 —

葛原しげる作歌
小松耕輔氏作曲

一、降れ〳〵〳〵　ごん〳〵降れ
　野山に降れ　庭にも降れ
　ましろい雪　休まず降れ
　きれいな雪　ごん〳〵降れ
二、降る〳〵〳〵　ごん〳〵降る
　野山に降る　庭にも降る
　ましろい雪　休まず降る
　きれいな雪　ごん〳〵降る

（大正幼年唱歌第四集）

更に、フランスの名曲につけたのもあります。これは原作を意譯したものですが、「雪をんな」とか「雪ばばア」とかでなくて、雪を、「白髪のおぢいさん」にたとへた事が、面白いと思ひます。そして、「綿毛のやうな雪を！」といふところに、「鵞毛の飛ぶに似たり」といふ古い句も思合はされることです。

— 雪 —

葛原しげる歌

雪の中から
白髪のおぢいさん
笑顔をして　ニコ〳〵して
野山に　森に　おうちの庭に
綿毛のやうな雪をふらす

（大正幼年唱歌第十一集）

雪のものとしては、昔の童謠の中に、兵庫縣東神吉地方に

雪よ　ふれふれ
正月　ござる

といふのがあります。これは、年末の雪です、しかし冬のものたる雪とあられと又、みぞれとは、二月のものでもあります—冬ですから—それには次のがあります、

— 冬 —

相馬御風氏歌
弘田龍太郎氏曲

一、こん〳〵雪降れ　風も吹け
　　僕等は雪の子　寒くない
二、ひゆう〳〵風吹け　雪も降れ
　　僕等は　風の子　つめたくない
三、霰の寶玉　雪の花
　　子供の世界に　雪はない

第一節の「雪降れ、風もふけ」といつて、「僕等は—」「風の子」でなく「雪の子」であることは、考へてあります。そして、第二節は、風と雪との位置を換えて「雪の子」でなく、「風の子」にしてあるのですが、幼兒でなくても、紛れ易いと案じます。「寒くない」「冷たくない」も、似すぎてゐて、覺えにくいことです。第三節の「霰の寶玉」もむづかしいですが、しかし、別の意味に於て、

「僕等は……寒くない」
「僕等は……冷たくない」
「子供の世界に・雪はない」

は、さすがに、此の作者の老手たる所以であります。この「あられ」と「みぞれ」との易しい童謠に次のがあります。これは、「バラ〳〵」と「サラ〳〵」との擬聲の交錯から來る面白味です。一體に、幼兒といはず、擬聲、擬態の表

現は、大人の世界でも端的で、適確で、動かないところに、意義も價値もあります。そして次の一篇は霰と雲とを、雀に活かして屋根と、背戸とを舞臺にしたのです。かうなると、如何に似てゐましても、他に紛れやうがなくて、結構です。これも此の作者の老手たる所以であります。

―霰と雲―

野口雨情氏歌
中山晋平氏曲

一、霰はバラ〳〵　お屋根にバラ〳〵
　雀もバラ〳〵　お背戸にバラ〳〵
二、雲はサラ〳〵　お屋根にサラ〳〵
　雀もサラ〳〵　お背戸にサラ〳〵

（童謡唱歌名曲全集）

「あられ」だけのものに、私にも舊作があります。これは、「コン〳〵」と「バラリ〳〵」の擬音で活かしたものですが「お手手をひろげて、あられをうけよ」は、作曲者の想なのです。まことに、霰が降り出すと、飛出して、面白がつて、手に受けとりたく、帽子で、又、ハンカチで、落ちて來るのを拾ひ集めたくなるのです、私達、田舍の少年時代には、前掛をして遊んだ事もあつたので、よく、その前掛を開いて、霰を受けました。

又、あられが、屋根で跳ね、庭で跳ね、身輕に氣輕に刎ね廻るのを、「コンコロ踊」と見て、その題の童謡をものしたこともあります。ある觀方からは、雪よりも、霰の方が、動的であり、リズミカルであり。たしかに童謡的でありますので、幼兒には悅ばれさうです。そして此の曲が、極めて、印象的でありますので、お役に立つと信じます。

―あられ―

葛原しげる作歌
梁田貞氏作曲

コン〳〵コン〳〵あられがふる
バラリ〳〵コン〳〵〳〵〳〵〳〵
おやねにあられがふる
バラリ〳〵〳〵
お手手をひろげてあられをうけよ
コン〳〵コン〳〵あられがふる
バラリ〳〵〳〵

（大正幼年唱歌第八集）

雪の遊びは、幼兒にも、スキーが有り得るのですが、それよりも、「雪釣り」や「雪兎」が、もつと、幼兒向であります。かなり前に次のがあります。

この第二節の「ぴよん〳〵はねる」は、無論、現實ではありません。

—ゆきうさぎ—

鹿島鳴秋氏歌
弘田龍太郎氏曲

一、赤いお盆の雪兎
おめめのないのが　かなしいか
長いお耳を　ふるはせて
ぢつとしやがんだ　いぢらしさ

二、赤い南天　おにはから
ふたァつとつて　つけたらば
おめめができて　うれしいか
ぴよん〳〵はねる　雪うさぎ

（童謡名曲全集）

「雪うさぎ」が大體、室内のものであるやうに、戸外のものに「雪だるま」があります。雪だるまの面白味は、荒削りの坐像であることです。一體達磨は、坐つてゐるのですが、雪達磨も坐つてゐるのです。ヨーロッパの子供は立姿の雪人形（達磨でなく）を作り、名もSnow man（スノウマン）といふさうですが何れにしてもその特徴は、その目、その口、また、その鼻などを木切や、小石や、日本では、たごんで造るゴロテスクな興味です。眞白い、雪達磨が、眞黑いたごんの目を入れて貰つたところは、如何にも、ギョロリとして、見えさうでもあるのです。そして次の日の日の出まで、雪の中に寒がりもせず、坐つてゐることは、幼兒には不思議でもあるのです。

—雪だるま—

葛原しげる歌
小松耕輔氏曲

一、雪だるまが　只ひとり
坐つてぢつと　にらんでる
黑眼で　ぢつと　にらんでる
たごんの目でも　見えるのか

二、雪だるまは　元氣もの
たくさんつもつた　雪の中
ひとりで　ぢつと　雪の中
さむくはないか　雪だるま

（大正少年唱歌第二集）

二月の年と限つたわけではありませんが、昔から火鉢や炬燵が、冬のものであるやうに、「ストーヴ」が、冬の幼稚園のものであります。かつて「腰かけ」を擬人化して幼兒童謡も作りましたが、次のストーヴは、よし、理窟つぽくても、一度は考へさせても見たい事柄であります。

この歌詞の中で、火の燃えるのを「トロ〳〵」としましたところ、「ボウ〳〵」でなくてはならぬ、と、いはれた若き関秀學者があつたのですが、幼稚園などのストーヴは、靜

かに、軟かにトロ〳〵燃えさせてありたいのです。「ボウ〳〵」と強く燃やしたくないのです。少くとも、朝、雪の降つてゐる事が分りますや、幼兒の登園前に早くより、ストーヴには火を入れて、待つてゐてほしいものです。幼兒の姿が見え出してから、急に、ボウ〳〵焚きはじめるやうなあわて方は、禁物です。

―ストーヴ―

葛原しげる歌
梁田貞氏曲

廊下は　寒い風が吹く
お庭は　雪がふつてます
それに　おへやは溫かい
ごうして　こんなに溫かい
それはおへやの　ストーヴが
トロ〳〵もえて　ゐますから

（大正幼年唱歌第四集）

これも二月と限つたことではありませんが、この頃、「梅」があり、「梅」といへば、「鶯」があります。しかし、昔からこの二つは、離る可からざるコンビにされてゐますが、事實は、鶯は、梅の花は咲いてゐても、同じ庭にある松の木の枝で鳴いてゐる事もあり、二月よりも、三月、三月よりも四月、ほんとに溫かくなつた春、鳴くのを、よく聞くこともありますが、しかし、傳統的に、「竹に雀」、「柳に燕」、そして、「梅に鶯」もよいではありませんか。

―梅　に　鶯―

葛原しげる歌
小松耕輔氏曲

梅の木の枝に　梅の花が咲いた
いくつも〳〵知らぬ間に咲いた
梅の花さけば　鶯よろこび
お山の奥から　うたひに出て來る
ケキヨ〳〵ホーホケキヨ　鶯ホーホケキヨ
ケキヨ〳〵ホーホケキヨ　うれしやホーホケキヨ

（大正幼年唱歌第四集）

最後に、二月に限つたものに「紀元節」があります。日本帝國、ほこりの二月十一日です。その式歌は、その昔、高崎正風氏歌、伊澤修二氏曲、のがあります。それは「雲に聳ゆる―」の名歌曲です。しかし、それは中等學校でも、四節全部を歌はないで、多く、第一節と第四節とだけ歌つたりして甚だ、無意義に近い取扱ひにさへなつてゐるのですが、それは、ごうあつたにしても。

「海原なせる埴安の―」
「天つ日嗣の高御座」

なぜと、幼兒の世界のもので有り樣がないのです。他の

式歌も、多く同じ程度のものでありますので、大正のはじめ、幼兒唱歌の新作に志ざした時、當時の三大節の歌を新作したのです。そして紀元節のは次のです。これは、只一節だけのものですが、この他には、もう、いふべきこともないので、敢て、蛇足を添へなかつたのです。もし短かすぎれば、時に「君が代」も二唱されるやうに、これも二唱して、この意味を强調したいと望んだのでした。

―紀　元　節―

葛原しげる作歌
小松耕輔氏作曲

昔神武天皇が
惡ものどもを平らげて
はじめて
天子の御位に
おつきなされた　めでたい日
その日は二月十一日よ
いはへやいはへ　紀元節

（大正幼年唱歌第四集）

保育實習科生徒募集

（官報拔萃）

本年四月入學せしむべき保育實習科生徒を募集す其要項左の如し

昭和十五年一月　　東京女子高等師範學校

一、募集人員　凡二十四名
二、出願期限　二月一日より同二十九日まで
三、學　資　學資は總て自費とし授業料年額金五十五圓を徵集す
四、選拔試驗　入學志願者に對して學科試驗身體檢査人物考査を行ふ

1、學科試驗　國語（解釋作文）、理科（動物）、圖畫（自在畫）、音樂（唱歌）
2、期日　本年三月七日、八日の二日間
3、場所　東京女子高等師範學校

（附記）出願の手續其他詳細の事項は之を記載せる印刷物を用意せるに付其送付を希望する者は參錢郵券を貼附し宛名を記載せる封筒を添へ本校に請求すべし